「英語ディベート」への道のり　～プロセス編～

東京都北区立飛鳥中学校　本田　大輔

目次

１　ディベートなんて無理、無理、絶対に無理！
２　「つけたい力」と「育った生徒像」を描くことからスタート
３　具体的な指導の道筋
４　ディベートの落とし穴は「２つ」
５　ついにマイクロ・ディベートへ
６　「探求・コーラルマップ」は「フリー・バトル」の準備で大活躍！
７　北区の公開授業の講師は中嶋先生
８　２校（３年）によるオンライン・マイクロ・ディベート
９　「書く力」がディベートの「起爆剤」に
１０　生徒たちが、ディベート学習から学んだことは
最後に…　バックワードデザインは果てしなく深い

１　ディベートなんて無理、無理、絶対に無理！

教員になって１５年が経過しました。憧れてはいるものの、挑戦したことのない活動が１つありました。それが「英語ディベート」です。みなさんは挑戦されたことがありますか。
人間の脳は「思い込み」によって自分の能力に蓋をしてしまう性質があるそうです。

「１マイル(約 1.6km)を４分以内で走ることなんて不可能」

これは 1950 年代まで世界中のランナーの中で信じられてきたことです。
しかし、英国生まれのロジャー・バニスターが 1954 年５月６日に、１マイルを３分 59 秒４で駆け抜けた後はどうだったでしょう。なんとそのわずか７週間後には、オーストラリアでその記録が別のランナーによって塗り替えられたのです。そしてその後１年間で「23 人」のランナーが１マイルを４分以内で走ることに成功しました。この現象は、「ロジャー・バニスター効果」と呼ばれ、次のようにその仕組みが解説されています。
人間の脳は、あることを不可能だと思い込むと、脳の中に「認知バイアス」を作り、自分で勝手に限界を決めてしまうというのです。反対に、絶対にできるという信念と具体的なイメージさえあれば、人間の限界を押し広げることができることも同時に意味しています。
私にとっての「１マイル４分以内」は、「英語ディベート」でした。
中学生に英語ディベートなんて無理だろう。そう考えていたからです。
2015 年にベネッセによって行われた調査でも「英語ディベート」を実施している教員は全体の 3.9%に過ぎず、数ある言語活動の中で、断トツで最下位の活動となっています。
しかし、昨年一年間、中嶋塾@東京 2023、そして地球市民オンライン塾 2023 で中嶋先生から学ばせていただいたおかげで「自分にもできるんじゃないか」という期待と具体的なイメージが脳内に描けるようになりました。

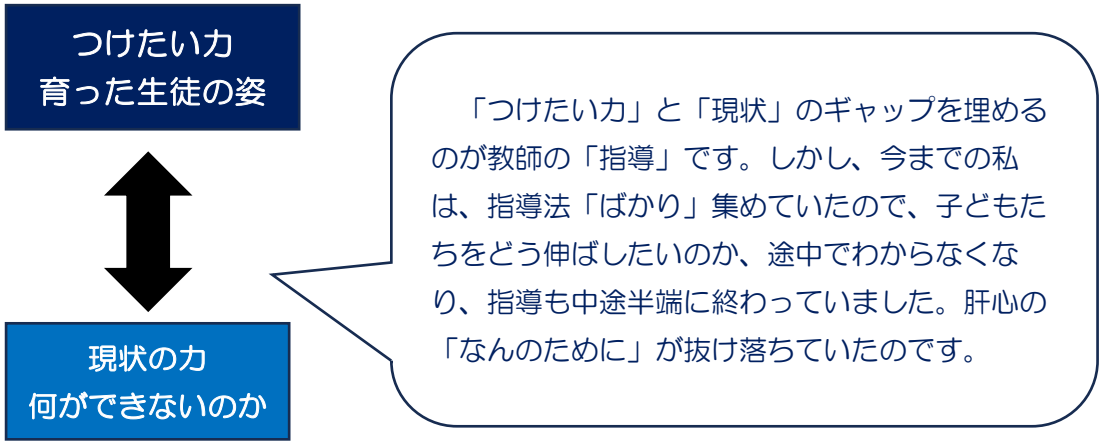
「できるんじゃないか」と思えたもう一つの要因は、同志の存在です。福島県尚英中の八木先生と昨年の４月の段階で「オンライン・ディベート」を３年のゴールに置こうと話し合っていたのです。まだ年度当初でしたが、最終ゴールを見据えてスタートを切ることができていました。二人とも、これまで登ったことのない山に挑戦することにワクワクしていました。

このレポートは、東京都の飛鳥中学校と福島県の尚英中学校が「オンライン・マイクロ・ディベート」を行うまでのプロセスを詳細に書き残したものです。私（本田）のレポートは「指導プロセス」に重点を置いてレポートを書き記しています。一方、八木先生は「生徒の成長」に焦点をあてています。ただ、どちらから先に読んでいただいても「謎解き」を楽しんでいただけるようになっています。

２．「つけたい力」と「育った生徒像」を描くことからスタート

まず私が取り掛かったのは「英語ディベート」という教育活動を通して生徒に「つけたい力」と「育った生徒像」を言語化することでした。

「英語ディベート」を実践するために「どんな指導法があるか」を考えたり、集めることに手が伸びそうですが。そこはぐっと我慢です。「つけたい力」や「育った姿」があるからこそ、そこから逆算して、ぶれずに進むことができる、のです。



ところで、ディベートには勝敗がつきまといます。生徒の中には、勝敗にこだわってしまったり、逆に勝敗がつくことを極度に避けたがったりする生徒もいました。また、一部の生徒だけが参加し、他の生徒は傍観しているだけ、という言語活動になることも避けたいと考えました。そこで、大人数でのディベートではなく、「３人１組」で行うマイクロ・ディベートを行うことに決めました。

これであれば、A さんが肯定側、B さんが否定側、C さんがジャッジとなり全員に役割があります。その役割を順繰りにまわすことで、全ての立場から、ものの見え方や他者への配慮を同時に学ぶことが出来ます。

先ほど、ディベートを忌避する生徒の存在を伝えましたが、ディベートにはネガティブなイメージが生徒の中にあることも知りました。「はい、論破」や某国の大統領選挙での討論会のような、相手の話を聞かずに一方的に自分の考えをまくしたてるイメージが、「ディベート」という言葉の中にあるようでした。

言うまでもありませんが、私たちが生徒につけたいのは、自分も他者も、そして社会も幸せにする力です。しかし、彼らを取り巻く環境で日々起きている問題を鑑みると、その「当たり前」をどれだけ大事にできるか、生徒の心理的安全性を担保することが我々の大きな責務なのだと痛感します。子どもが何らかの活動に積極的に取り組めないのであれば、それは「英語力」だけでなく、その他の心理的な要因や背景も考えられます。教師は、それら一つ一つを丁寧に解きほぐしていく必要があります。

このようなことを考え、「英語ディベート」を通してつけたい力を、私は次のように設定しました。

> 日常的・社会的な話題に関して、狭い視野（主観）ではなく、様々な立場や観点から考え、複眼的な思考ができる力を育成する。その際、相手の考えを尊重し、配慮を示しながら（譲歩・共感）、相違点を確認した上で、根拠に基づいて主張（客観）できる。その結果、建設的な議論をし、より良い考えや意見を構築できる生徒を育成する。

キーワードは**「複眼的な思考ができる力」「相手の考えを尊重し、配慮を示す」「根拠に基づいて主張する」**です。

ディベートを通して、生徒たちが将来、様々な立場や観点から考えることができるようになってほしい。そうすれば、相手の考えを深く理解したり、その人の意見や考えの背景を想像したりできるようになるのではないか。論理的な意見をぶつけ合うことができるようになれば、その生徒は感情的な議論を避けることができるのではないか。「英語ディベート」を体験することで、その生徒は将来、話し合い、伝え合うことを諦めない、たくましい人間になってくれるのではないか。そんな生徒たちが今後の日本の社会を支えてくれるのではないか。

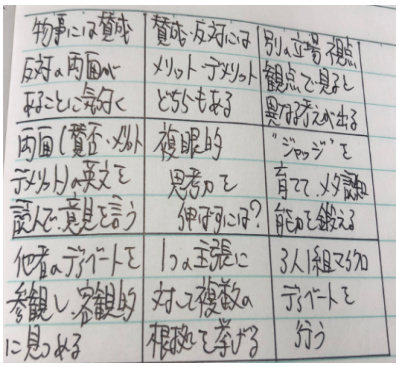
そう考えて、私たち二人はディベート活動に取り組み始めました。初心を忘れないために、「育った姿」を八木先生とオンライン会議で何度も、何度も確認し合いました。

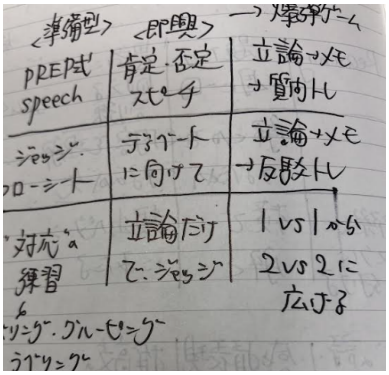
３．　具体的な指導の道筋

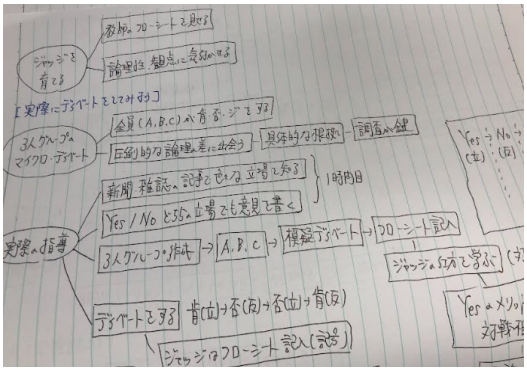
こうして「つけたい力」と「育った姿」を決定した後、その力をどのようにしてつけていくかをイメージし、デザインする段階へ進みました。

私は２つの方法で計画しました。１つは、自分で考えること。もう１つは、先人から学ぶことでした。

１つ目は自分で考えること。まずは以下の写真をご覧ください。







４月から何度も書き直したノートの一部です。一度書いては見返し、何度もマンダラートをブラッシュアップしていきました。一度書いただけではイメージが固まりません。ディベートを行う１１・１２月

までに４回ほど書き直しを行いました。一度俯瞰して見直すことで、新たな発見があったり、以前は気付けなかった指導の抜け落ちや現状との乖離も気づけたりするようになりました。
　私は非常に不器用です。何度も、何度も「手」で書き直すことで、脳内でイメージを固めていく作業が必要でした。

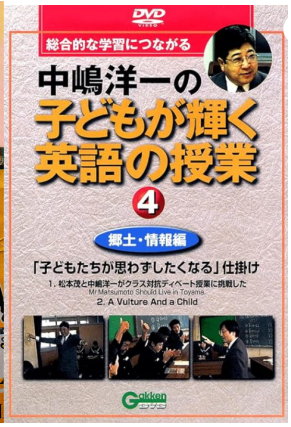
　写真では、思考ツールのマンダラ・チャートと階層式マッピングを使って、「複眼的思考力を身につけるには？」と自分に問いかけています。マンダラートの中央で「自分に何を問うか」が最も重要です。他にも「相手の考えを尊重し、配慮できるには？」「根拠に基づいて主張できるには？」とマンダラートをさらに書き出していきました。そのように書き出すことで「付けたい力」「育った姿」からぶれない指導ができるようになっていきます。その後、それらを階層式階層式マッピングに整理し直し、どんなトレーニングをいつ、どの時期に、どれくらい組み込めばいいのか、どんな表現をインプットすればいいのかを書き出しました。

　何より大事だったのは、「まずは自分で考える」という姿勢でした。マンダラートの全ての枠が埋まる必要はありません。しかし、全ての枠を埋める気概をもって取り組むようにしました。１つのマンダラートにつき４分と決めて、書き出していき、４分経ったら、次のマンダラート、４分経ったらまた次のマンダラートと進んでいきました。そうすることで、前のマンダラートの枠を埋めるようなアイディアや過去の記憶と経験が浮かび上がってくることが多々ありました。全ての枠を埋めることが目的ではありませんが、脳に汗をかきながら真剣に取り組むことで、知的興奮を味わうことができました。また、自分の中にあるモヤモヤに直面することもできました。そのモヤモヤが空腹感となって、次の行動へと繋がるのです。すぐに答えを求めるのではなく、まずは自分の頭で考える主体性を教師として大事にしたいものです。
　その空腹感とは、疑問のことです。どうしてもイメージできない箇所が明確になったのです。

「う～ん、どうしてもここの指導がイメージできないなぁ。どうしたらいいんだろう。」

　このような「空腹感」が自分にあったことで、第２の方法が一層効果的になったのです。

　２つ目は、先人から学ぶことです。
　バイブルとなったのは『**英語のディベート授業　３０の技**』（中嶋先生著）とDVD『**中嶋洋一の子どもが輝く英語の授業④**』です。以前通読した時と異なり、今回は「どんな情報がほしいのか」という課題意識を明確にもっていました。ディベート指導経験のない私には「見えていなかった世界」がそこにはありました。
　どこに指導の落とし穴があるのか、生徒の声から具体的に編み出された解決策と指導法、そして考えつくされた仕掛けにワクワクが止まらなくなりました。



想像もつかなかった落とし穴の１つは、賛成と反対側の反駁が「対応しない」こと。もう１つは、「ジャッジをいかに育てるか」ということでした（このことについては後述します）。

DVD は何度見返しても衝撃を受けました。一度目は圧倒されるだけで終わりますが、二度目三度目と見返すと、そこに至るまでの緻密な指導の数々に気づくことができました。中嶋先生に直接質問するのではなく、映像の中にいる生徒と対話しながら、自分が生徒になったつもりで見ることが大事でした。

「もっと英語が話せるようになりたい。」「もっと準備したい。」「もっと仲間と関わりたい。」そして「私たちはできるんだ。」という気持ちを生徒たちの中に育むために、中嶋先生がどのような「在り方」で生徒たちに接していたのか、自分と対話する日々でした。

また、他に参考にしたのは、YouTube に載っている『授業で行う英語ディベート』と『英語ディベート入門』（河野周著）でした。前者は高校での実践ですが、その根底に流れるものは中学校での指導と同じです。

それらを分析して分かったことは、「①土台のトレーニング（発音・語彙・文法など）と②本番のディベートを分解したトレーニングを系統的に行っている」ということでした。私は以前、女子バレーボールの指導をしていました。その際、ゲームの特定の場面を分解し、細分化して順番に並べてトレーニングをしていました。その時と同じように指導すればいいのかと膝を打ちました。

これら２つの事前研究を経て、一気に指導への道筋が見えてきました。

ディベートを分解すると具体的にどんな指導が必要なのか、以下にまとめてあります。

ただし、私と八木先生が取り組んだディベートはフォーマル・ディベートやパーラメンタリーディベートとは異なりますので、そこはご注意ください。

[マイクロ・ディベートまでの１０のステップ]

① PREP で意見の組み立て（Point→Reason→Example/Evidence/Episode→Point）
② 論題に対して「肯定」の理由をできるだけ多く出す練習
③ 論題に対して「否定」の理由をできるだけ多く出す練習
④ 立論スピーチ　→　聞き手は「メモ」　→　聞き手は「内容の確認」を立論者にする
⑤ 立論スピーチ　→　聞き手は「メモ」　→　相手の立論に「反駁」する練習
⑥ 論と論を“対応”させる練習
⑦ 「ジャッジ」を育てる
⑧ 同サイド異アーギュメントで「観点」を育てる
⑨ ３人１組マイクロディベートを体験する
⑩ 「フリーバトル」対策として相手の反論を予測し、それへの反論を準備する

ディベートで起こりうる場面を細分化し、並び替えた結果、上記のような指導手順が浮かび上がってきました。

しかし、自分のクラスで全ての手順を実施したかというと、そうではありません。このレポートの最初に示したように「生徒の現状の力」と「育った姿」を埋めるのが最適な指導です。私は昨年、中嶋先生の

ご指導のもと、①から④までは生徒ができるようになっていました。

例えば、ある論題に対して「肯定」「否定」の理由をできるだけ出す訓練は「爆弾ゲーム」というアクティビティを通して数多くこなしていました。「爆弾ゲーム」というのは、ペアで１つの消しゴムを爆弾に見立てて遊び感覚で意見を言う活動のことです。ペアの片方が１つ理由を言ったら、消しゴムをパートナーに渡します。渡されたパートナーは別の理由を言ったら、また消しゴムを相手に返します。そうやっていくつも「理由」「具体例」「エピソード」を言う練習を積み重ねていたのです。

④の「メモ」も、「インタビュー・階層式マッピング」という活動を通して鍛えてきました。その活動では、相手の話の「キーワード」を聞き取って繰り返し「相槌表現」を使って反応した後、「さらなる関連質問」をする、という指導をしてきました。それがディベートにも見事に繋がっていきました。ディベートにおいても相手の話のキーワードを聞き取り、要旨を理解するというスキルは必須です。わからないところや確認したいことがあれば、質問や確認をするのもディベートでは欠かせないスキルの１つでした。

また、聞き手がキーワードを聞き取れるように話すためには、機能語ではなく内容語に焦点を置いて話す必要があります。そのことは、普段の音読でも大きな指導ポイントとして意識させてきました。話す側も「キーワード」を強く、大きく、長く話すように意識させていたのです。

このように、中嶋先生から受けた系統的なご指導の成果が、ディベート活動で見事に昇華されてきたのです。私は３年間の系統的な指導をデザインすることの重要性を、今さらながら気づかされました。

さて、１０のステップの①から④を復習した後、⑤「反駁」の練習から、私はディベートの指導をスタートすることができました。最初の指導がスムーズに行くと子どもたちもノッてきます。

「できるかもしれない」という自分への期待が、その後の指導をよりスムーズに展開させてくれました（⑧の同サイド異アーギュメントという活動は聞きなれない言葉だと思いますので、後述します）。

４．ディベートの落とし穴は「２つ」

マイクロ・ディベートに取り組んだ時に陥る失敗がいくつかある、と中嶋先生の著作から学びました。

私はその落とし穴を分析し、「２つ」に絞り込みました。

① 反駁が立論に**対応**せず、論の**言いっぱなし**になってしまうこと
② **ジャッジ**を育てられず、判定に不平不満が残ってしまうこと

①の「論と論を対応させること」を指導するために、ある日の授業で、Which is better for students, summer vacation or winter vacation?というトピックで話し合わせました。

生徒たちはどちらの立場でも理由がたくさん思い浮かぶし、反論もある程度できるようになっていました。そんな日を選んで、フォーマル・ディベートのルールにあえて従わず、５分以内で自分の意見をど

んどん伝え、さらに反駁もしてよい、というルールで活動をしました。
　このルールに教室は白熱。生徒たちは５分間お互いの論をぶつけ合っていました。５分後、時間が過ぎたことを伝えても、全員を黒板に向かわせるまでに時間がかかったことを覚えています。
　さて、ここからが一番大事な指導場面です。その時の様子を再現してみます。

本田　「夏派のみなさん、メリットをどんどん言ってください。その後、冬派のみなさんはそれに反論してくださいね。」
夏派　「夏には海で泳ぐことができます。」
冬派　「冬にはスキーやスノボができます。」
夏派　「夏はかき氷やアイスがおいしいです。」
冬派　「冬にはクリスマスプレゼントとお年玉がもらえます。」
夏派　「夏休みは長くてゆっくり休めます。」
冬派　「冬休みはこたつでゆっくりテレビが見られます。」

　なんと中嶋先生の著作と同じような展開になりました。黒板がいっぱいになるくらい意見を書きだしてから、次のように生徒たちに尋ねました。

本田　「自分たちが勝っていたと思う人は天井に突き刺さるように手を挙げてみて。」

　そう挑発すると、中３でも手をビッと挙げてくれるから本当に生徒はかわいいものです。

本田　「お互いのメリットがずらっと縦に並んでいますね。夏には海で泳げたり、マリンスポーツが楽しめたり、とってもエキサイティングだね。冬にはスキーやスノボ、それに雪だるまを作れたりするね。どっちもみんなにとって楽しいものばかりだね。」

　私は、泳げる・マリンスポーツとスキー・スノボ・雪だるまに蛍光チョークで線を引きました。そして生徒の目が集まるまでじっと待って、次のように問いかけました。

本田　「でも、これってディベートで論理的に勝敗をつけられるのかな？（間をとる）夏と冬にできることをお互いに言い合っているだけで、それぞれの論に全く対応していないと思いませんか？」

　その瞬間、ハッと我に返った生徒たちが出てきました。

本田　「例えばここは対応していますか？夏はかき氷やアイスがおいしい。それに対して冬はクリスマスプレゼントやお年玉がもらえる。」
生徒　「全然対応していませんね（笑）」
本田　「じゃあ、どうしたら対応する反駁になるんだろうか？ちょっと全員でやってみよう。海で泳ぐことができる、に対応した反駁をするには？」

生徒　「日本の海は汚すぎる。あと、めっちゃ混んでて疲れる。あ、日焼けもしちゃう。あー、そうだ、クラゲに刺されるからやめた方がいい！！」
本田　「いいね（笑）そうやって相手のメリットを消していくといいですね。それでは、冬のクリスマスプレゼントとお年玉はどうだろう？メリットしかない気がするけど？」
生徒　「お金をたくさん持つのは危険。自分ではまだそんな大金をコントロールできない。」
生徒　「いやいや今のうちから将来のためにお金を管理する力をつけたほうがいいよ。」
生徒　「短期的には失敗するかもしれないけど、長期的に見たら失敗も大事だ。」
生徒　「誰のお金だと思っているんだ！！（笑）」

子どもたちは自分たちで気づき始めると一気に加速します。肯定と否定のどちらの主張にもメリットとデメリットの両面があること、さらには立場や観点によってものの見え方が異なることまで、この時点で気づいてしまいました。

中嶋先生は、昨年私たちに次のように教えてくださっていました。

> 生徒が生き生きと参加する授業には、３つの「K」がふんだんに取り入れられています。生徒は「（自分の力で）**気づきたい**」「（仲間と）**関わりたい**」「（自分で）**決めたい**」という願いをもっています。

※ ただ、この時にしておくべきだった指導がもう１つありました。それは「事実と考え」を明確に分けることでした（実際、この指導は２年生までに終えておく必要があったと痛感しています）。

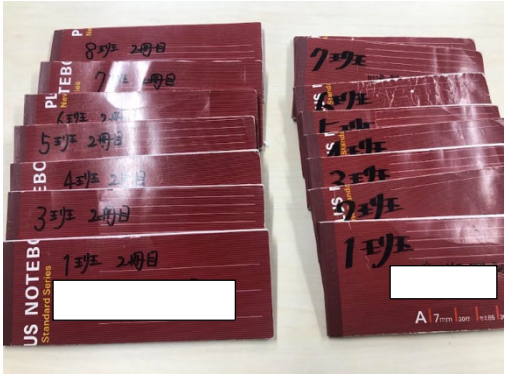
その時点では、多くの発言をさせることに自分自身が夢中になっており、どんな発言も許容する段階でした。しかし、ある時点からは次のステップに進むべきでした。

「〇〇はきれいだ」「〇〇は楽しい」というのは「事実なのか、考えなのか」という指導をして、「事実と考えはどちらに説得力があるのか」という指導をしておくべきでした。

さて、ディベートにおける次の落とし穴は「**ジャッジ**」です。３人１組のマイクロ・ディベートでは、肯定側と否定側だけでなく「**ジャッジ**」の存在があります。このジャッジが非常に重要な役割を演じています。それと同時に、自分をメタ認知する機会を与えることができます。授業中に、論と論を戦わせることだけに指導を傾けてしまうと、この「ジャッジ」を育てきれないままになってしまいます。どちらの論に説得力があるのか、生徒だけで客観的な判断ができなければマイクロ・ディベートは成立しません。

どのようにジャッジを育てたのかをご紹介する前に、以下の「リレー・ノート」をご覧ください。リレー・ノートとは、中嶋先生の代表的な指導の１つです。B5 サイズのノートを３分割して作ります。それを、１人が意見を書き、リレーのバトンのように班で回していく学習方法のことです。取り組んだ生徒たちは時間も忘れてライティングに取り組み、貪るように友だちのライティングを読みます。

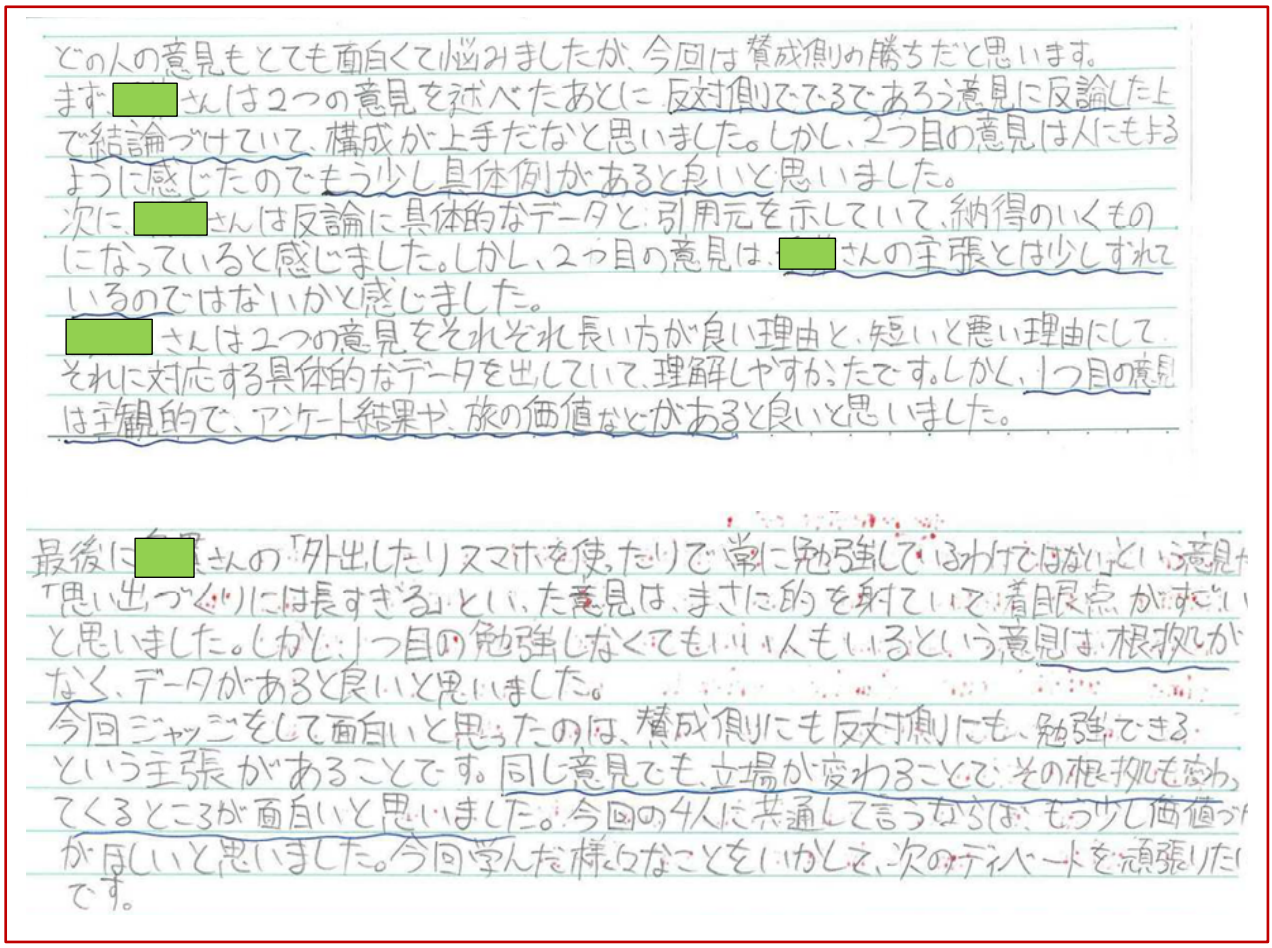
（中身のご紹介は、別項でご紹介させていただいています。）



ここで、ある班の「リレー・ノート」を紹介します。その班は５名で構成されていました。

１人目が、あるトピックに賛成意見を、２人目がそれに反対意見を、３人目は１人目を擁護する賛成意見を書き、４人目は２人目を擁護する反対意見を書くという設定にしました。最後の５人目は「ジャッジ」の役割を果たし、賛成と否定のどちらが勝ったのか、客観的な判定をすることにしました。

画像はその５人目の「ジャッジ」の抜粋です。少し長いのですが、様々なキーワードが出てきています。授業で何を学んだのかが分かりやすいものとなっていると考えます。ご覧ください。



どの人の意見もとても面白くて悩みましたが、今回は賛成側の勝ちだと思います。
まず[redacted]さんは2つの意見を述べたあとに反対側でてるであろう意見に反論した上で結論づけていて、構成が上手だなと思いました。しかし、2つ目の意見は人にもよるように感じたのでもう少し具体例があると良いと思いました。
次に[redacted]さんは反論に具体的なデータと引用元を示していて、納得のいくものになっていると感じました。しかし、2つ目の意見は[redacted]さんの主張とは少しずれているのではないかと感じました。
[redacted]さんは2つの意見をそれぞれ長い方が良い理由と、短いと悪い理由にしてそれに対応する具体的なデータを出していて、理解しやすかったです。しかし、1つ目の意見は主観的で、アンケート結果や、旅の価値などがあると良いと思いました。

最後に[redacted]さんの「外出したりスマホを使ったりで常に勉強しているわけではない」という意見や「思い出づくりには長すぎる」といった意見は、まさに的を射ていて着目点がすごいと思いました。しかし、1つ目の勉強しなくてもいい人もいるという意見は根拠がなく、データがあると良いと思いました。
今回ジャッジをして面白いと思ったのは、賛成側にも反対側にも、勉強できるという主張があることです。同じ意見でも、立場が変わることでその根拠も変わってくるところが面白いと思いました。今回の4人に共通して言うならば、もう少し価値づけが欲しいと思いました。今回学んだ様々なことをいかして、次のディベートを頑張りたいです。

「どちらに説得力があるか」という視点に立ち、客観的な事実を取り出そうとしています。ジャッジの指導が不十分だと「こっちの方がたくさん話していたから」とか「あっちの方が笑いをとれていたから」といった主観的なジャッジになってしまうことがあります。そうすると、生徒同士の人間関係がぎくしゃくし、ディベート活動に否定的で消極的な生徒を育てかねません。ジャッジが公平で論理的であればあるほど、根拠のある事実を探そうとし、ディベートの質が高まります。

ジャッジの観点については、生徒たちと話し合いました。フロー・シートを使いながら、どんな観点でジャッジをくだせばよいか、生徒たちの声を拾いながら作っていきました。「リレー・ノート」で先に取り組んでいたこともあり、子どもたちはすでに気付いていました。ですから、ジャッジする際に大切なこととして、言語化しただけで、すぐに浸透しました。

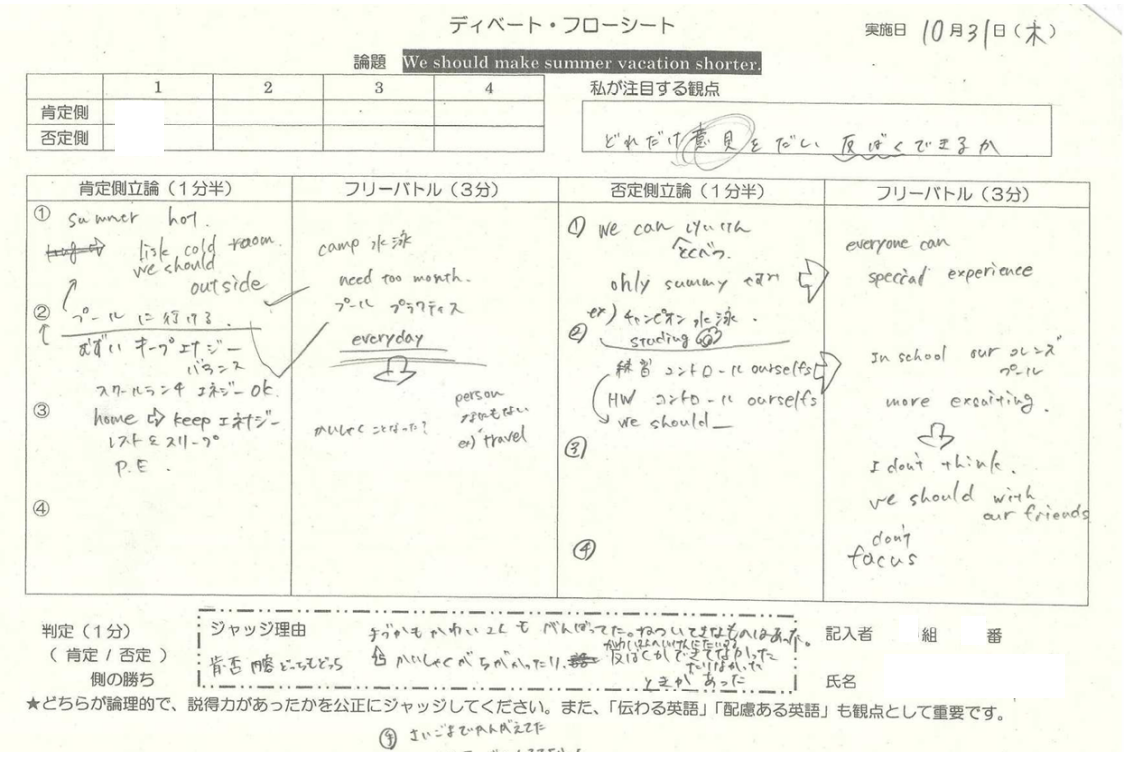
ジャッジの観点は次ページの通りです。

【マイクロ・ディベート　ジャッジの観点】

1 相手に聞こえる声、理解できる速度、易しい単語
2 相手の立論に「対応」した反駁をしているか、またその反駁は論理的か
3 客観的な根拠、例、証言、エピソードを示しているか
4 様々な立場や観点から考えられているか
5 相手への共感、配慮を示せているか

続いて、「ジャッジ」を指導したプロセスをご紹介します。

１つ目は「フロー・シート」の記入です。ここには相手の論のキーワードや要旨をメモすることができます。さらに、その論がどのように発展、反駁されたのかを矢印等で印をつけて展開することができるようになっています。以下の画像は実際のマイクロ・ディベートで使用したものです。フロー・シートは、中嶋先生の『英語のディベート授業３０の技』（明治図書）に載っていたものを参考に作成しました。



このフロー・シートを用いて生徒は要旨をメモし、繋いでいきました。代表生徒にみんなの前でディベートをしてもらい、どんなメモを書いたらいいのか、ペアでこのフローシートを見せ合って話し合わせます。さらに最後に、教師が作成したメモを公開し、どのようにキーワードを抽出し、矢印を引けばいいのかまで落とし込んでいきました。

「ジャッジ」を育てた指導の２つ目は「同サイド・異アーギュメント」という活動です。これは『英語ディベート入門』に載っていた活動です。指導のステップを確認するために、前述したディベートまでの

10 のステップを再度提示させていただきます。⑧のステップで活用した指導です。

［マイクロ・ディベートまでの１０のステップ］

① PREP で意見を組み立てる。
② 論題に対して「肯定」の理由をできるだけたくさん出す練習
③ 論題に対して「否定」の理由をできるだけたくさん出す練習
④ 立論スピーチ　→　聞き手は「メモ」　→　聞き手は「内容の確認」を立論者にする
⑤ 立論スピーチ　→　聞き手は「メモ」　→　相手の立論に「反駁」する練習
⑥ 論と論を“対応”させる練習
⑦「ジャッジ」を育てる
⑧ 同サイド・異アーギュメントで「観点」を育てる
⑨ ３人１組マイクロディベートを体験する
⑩「フリーバトル」対策として相手の反論を予測し、それへの反論を準備する

「同サイド・異アーギュメント」とは、肯定側・否定側に分かれてディベートを行うのではなく、どちらも「同じ立場」で立論スピーチを行わせ、どちらの立論スピーチがより説得力があったかをジャッジする活動です。つまり、肯定側、もしくは否定側同士で意見を戦わせ、どちらの論に説得力があったのかを競わせるというものです。この活動を終えると、生徒たちは口々に次のように言っていました。

「やっぱりデータがないと客観的な根拠にならない。」
「具体例やエピソードがあると引き込まれてしまう。」
「俺の主張は１つの観点からしか言ってないから弱いんだな。」

ディベートに慣れていないと、肯定・否定のどちらの論が良いのか判断できないことが多々あります。両者の主張は立場の異なる意見ですので、客観的に判断をくだすことが生徒たちにとっては難しいのです。その点、この同サイド・異アーギュメントは、同じ立場からの意見同士を比較することができます。そのため、どちらがより「説得力」があるか、客観的な「観点」に基づいて判断できるようになります。これらの指導を通じてジャッジは「観点」に気づき、習得していった結果が、前述したリレー・ノートの記述につながったと言えます。

5. ついにマイクロ・ディベートへ

「先生、いつ、トーナメント試合をするんですか？」
そう生徒たちから尋ねられるほど、彼らは自信がつき、期待し始めました。いよいよ、マイクロ・ディベートに挑戦する機が熟しました。
マイクロ・ディベートについては２段階で説明します。
１つ目は、ディベートの組み合わせです。組み合わせは、生徒の英語力と人間関係を考慮して私が責任

をもって決めました。「３人１組」を基本として全員が役割を果たせるように設計しました。ただ、人数と英語力の関係でどうしても「４人１組」になってしまうところがありました。そこは「２人ペア」を組ませ、協力しながら進めるよう配慮を求めて運営してもらいました。

また、マイクロ・ディベートは次のように実施しました。

１試合目	Ａ（肯定）	対	Ｂ（否定）	：Ｃ（ジャッジ）
２試合目	Ｂ（肯定）	対	Ｃ（否定）	：Ａ（ジャッジ）
３試合目	Ｃ（肯定）	対	Ａ（否定）	：Ｂ（ジャッジ）

このように、誰もが両サイドとジャッジを経験します。１４分で１試合できるように構成してあるので、１授業５０分以内に、全三試合を回すことが可能です。

２つ目はディベートの進行の仕方です。

０	立論交換と準備	［２分］
１	肯定側立論	［１分３０秒］
２	作戦タイム	［１分］
３	否定側反駁	［１分］
４	否定側立論	［１分３０秒］
５	作戦タイム	［１分］
６	肯定側反駁	［１分］
７	フリー・バトル	［３分］
８	ジャッジ・タイム（振り返り）	［２分］

指導の肝は「**０　立論交換と準備**」です。直前に相手の立論を知ることで、そもそも立論が聞き取れず、論と論が全くかみ合わないディベートになることを防ぐと同時に、相手の立論を潰すための作戦を「即興」で練ることをねらいとしました。この様子は中嶋先生の DVD『**子どもが輝く英語の授業**』（**４巻**）で見ることができます。学習者の不安と期待の心理を読んだ、画竜点睛の一手となります。

もう一つの指導の肝は「**フリー・バトル**」です。これは、通常のディベートでは登場しません。しかし、必然性のある「即興のやり取り」を仕組めば、どれだけでも話そうとするようになります。「フリー・バトル」は相手の「反駁」に対して「言い返したい」という気持ちになります。

「**フリー・バトル**」の時間の調整は生徒と相談しながら行いました。４分だと長いし、２分だと短すぎるとのことでした。ジャッジタイムでは、判断に悩み、５分かかってしまった時もありました（その時は５分でも決まらず、昼休みに話し合って結論を出していました）。

ディベートを進行させながら、中間指導として、私が生徒たちに伝え、何度も、何度も重ねて指導した

ことがあります。それは「**相手の話を理解していることを伝えること**」「**相手に配慮した英語表現を使うこと**」（その表現はすでにインプット済）でした。

“I see your point and I can understand what you want to say.”
“You told me that short summer vacation will have a great impact on us. I agree with that.”

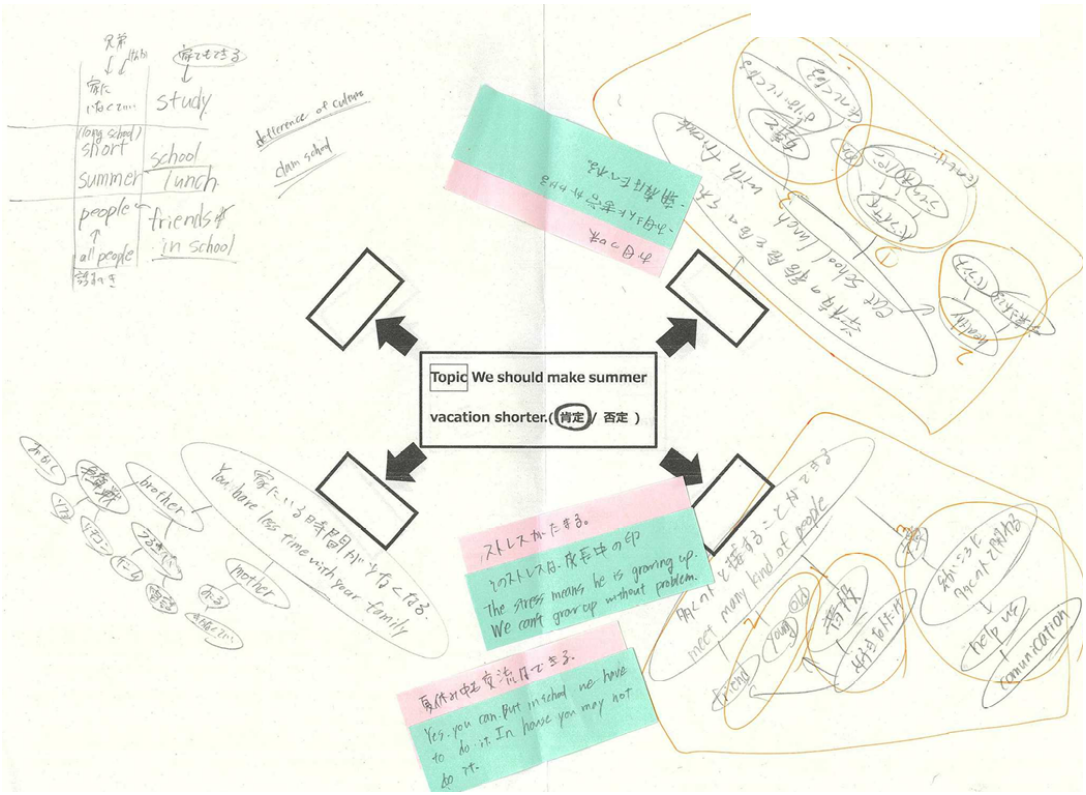
ディベートの勝敗を判断する基準の１つとして「**相手への共感、配慮を示せているか**」が大事だという意見が出て、全員で合意していました。また、マイクロ・ディベート本番前には、ディベートを通して、どんな人間になってほしいのかを一人ひとり目を繋ぎながら語りかけました。

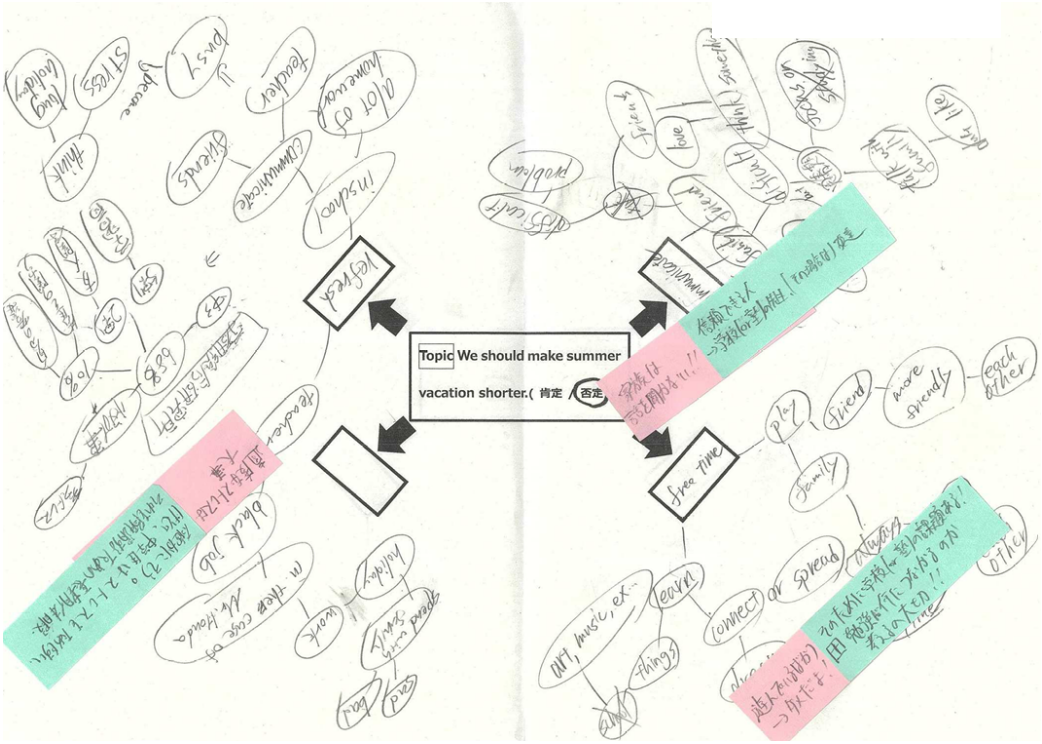
「自分の意見を感情論ではなく、根拠をもって伝えられる人になってほしい。その後、相手の意見をバカにせず、一度受け止めて、共感・配慮を示しつつ、相手の背景にあるものを想像できる優しい人になってほしい。相手の意見との相違点を見つけ、考え抜けていない点や別の視点や観点からの指摘をし、自分の考えを魂に込めて伝えられる、未来を創れる人になってほしい。だからこそ、ディベートに挑戦するんだ。」

これは全体でマイクロ・ディベートをする前に語った内容です。もちろんすぐに浸透するわけではありません。マイクロ・ディベートの練習をよく観察し、「共感・配慮」できている場面を見つければ全体に紹介し、さらに相手の「感情」も聞き出しました。その結果、感情的なネガティブなディベートをする光景は一切なくなり、心理的安全性を担保できる状態にすることができました。ディベート本番では、生徒たち全員一人残らずディベートに参加し、笑顔で相手の論を楽しむ光景がありました。

６.「探求コーラル・マップ」は「フリー・バトル」の準備で大活躍

マイクロ・ディベートで一番盛り上がるのは「**フリー・バトル**」です。立論と反駁はある程度内容の予想がついているのでディベートが成立します。その状態を一気に崩し、どこに議論が進むかわからないワクワクとドキドキを生み出してくれるのが「フリー・バトル」です。
中嶋先生の著作から学び、これこそが生徒が一番求めているものだと確信しました。その際、大活躍するツールが「**探求コーラル・マップ**」です。自分の論にどう反駁され、どう進んでいくのかわからないのです。だからといって何の準備もしないのでは中学生の「英語ディベート」は成立しません。次ページの図版をご覧ください。





画像にある ピンクの付箋 と 青い付箋 はなんだと思われますか。

実は ピンクの付箋 には、「予想される相手からの反駁」が、青い付箋 には、「その反駁に対する自らの反駁」が書いてあるのです。

この画像のように、「フリー・バトル」への対策として「**予想される反駁**」と「**反駁への反駁**」まで複数考えて臨ませるようにしました。その結果、生徒たちは「フリー・バトル」の前になると「いよいよ本番だ、ここで決まるぞ」のような雰囲気で緊張した面持ちで対峙するようになっていました。

３教室に分かれて実施した「校内マイクロ・ディベート・チャンピオンシップ」

７．北区の公開授業の講師は中嶋先生

紙面を割いてお伝えしておきたいビッグイベントが「オンライン・ディベート」の前にありました。

昨年２０２４年１１月１３日（水）、私は東京都北区教育研究会にて、英語ディベートの授業を公開しました。その研究授業の講師は**中嶋先生**でした。自分の校区に中嶋先生をお呼びし、校区の先生方に恩返しをしたいという長年の夢が現実のものとなりました。

その研究授業には、小中合わせて１００名の先生が来校してくださいました、中には、現在中嶋先生が指導されている先生方も、北海道、東京都町田市、埼玉県などから参加されました。

研究授業では、代表生徒によるマイクロ・ディベートを行いました。“We should make summer vacation shorter.”という論題で肯定・否定に分かれ、論戦を展開しました。その日仕掛けたのは、肯定派２名、否定派２名に分かれた「チーム戦」です。大勢の先生が見守る中、仲間がいることの心強さを感じてもらいたかったからです。

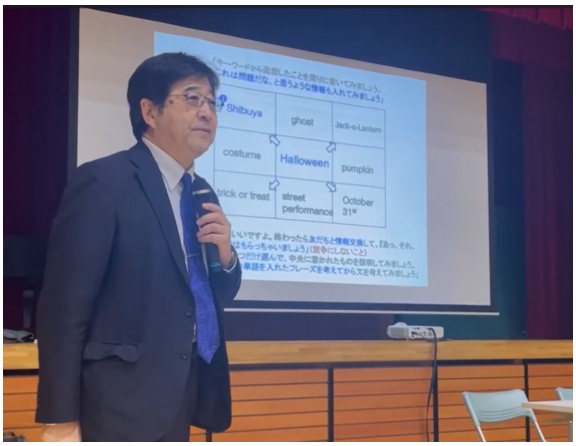
生徒たちは１００名という参観者に臆することなく、堂々と意見を述べ、時には会場を爆笑させるなど、いつも通り授業に取り組みました。そして、最大の山場である「フリー・バトル」の場面がやってきました。代表生徒４名がディベートを行い、その他の生徒はジャッジを行っていました。そのフリー・バトルの直前に、私は次のように投げかけました。

“Are there anyone who want to join this debate to support affirmative side or negative side?”

「白熱した議論を行っている４名の仲間に加わりたい人はいないか？」と投げかけると、なんとそれぞれのチームに立候補で「助っ人」２人が登壇するという緊張の展開となりました。
生徒だけでなく、会場に来られた参観者の方々も６人が即興でディベートする様子を、固唾を飲んで見守りました。終わりのチャイムが鳴った時、自然に会場から大きな拍手が起きていました。

研究授業翌日に生徒たちに感想を聞くと、
「あんなに楽しい授業は人生で初めてだった。」
「めちゃくちゃ緊張したけど、終わった時の達成感は半端なかった。」
「でも、もう体育館での授業はいいです。心臓に悪い」
というものでした。生徒たちの出来は１００点満点でした。しかし、私はまだまだだなと思いました。
まず、論題を “We should make summer vacation shorter.”としましたが、結果として一般的な内容が多く出てしまいました。講評で中嶋先生から「ディベートでは定義が大事です。誰にとって短くなればいいのでしょうか。もし、論題を We should make ではなく“Summer vacation should be shorter for third graders.（中３にとって）”とすれば、自分ごととして考え、悩みや葛藤、または自分がやっている工夫など具体的な理由が出てきたのではないでしょうか」というコメントをいただいたとき、フロアーから「あぁー。確かに」という感嘆の声が出ました。
ディベートの流し方ではなく、どの子も本気で話したくなる、聞きたくなる論題をいかに丁寧に考えておくべきか、と反省しきりでした。さらに、授業の途中で、判断に迷った場面も出てきてしまいました。想定とは異なる展開になったときに臨機応変な対応をしたい。どの生徒も本時のねらいに到達し、成就感を味わえる授業を目指そう。そのような新たな峰に向かって、再度スタートしてみようと決意を新たにすることができました。

代表マイクロ・ディベート



その後の中嶋先生のご講演

中嶋先生は研究授業まで何度も相談に乗ってくださいました。私が「答え」を求めるようなメールを送った際は、以下のような返答をしてくださり、私を「原点」へと戻してくれる気付きを与えてくれました。
最初のメールは、私の指導案が「活動ばかり」であることに気づかれた中嶋先生から送っていただいたものです。

授業は「教師の適切な指導」と「仲間との協働学習での気づき」があってこそです。
ずっと活動が続いていくのは NG です。教師のテコ入れや揺さぶりがあり、「え～！」
とか「あっ」という声が出なければ良い授業とは言えませんよ。

さらに、単元全体の指導案を確定させて、送付させていただいたあとも、中嶋先生の着眼点は不変のものでした。授業と授業をどうつなぐか、どこで切るか、生徒がワクワクして授業に臨むにはどうしたらいいのか、１回の授業だけを考えるのではなく、単元全体から俯瞰してみる見方を教わりました。

前時と本時の「のりしろ」、本時と次時の「のりしろ」は作ってありますか。
たとえば、前時で学んだことを最初の Teacher Talk の中に組み入れ、生徒とインタラクションをする中で、新しい言語材料も入れていますか。

振り返りで「学んだこと」だけでなく「まだモヤモヤしていること」を書かせていますか。
さらに、次時の予告として、何かを見せて問いかけ、揺さぶるようにしていますか。

そこができているかどうかを編みかけにすることで、単元を一括りにすることができ、
まだ「定着していないこと」が浮かんできますよ。

研究授業まで残り３日。緊張で一杯になっている、弱気な私を救ってくださったのも、中嶋先生の最後のメールでした。３日前、私は焦りから、中嶋先生に「答え」（活動のヒント）を求めたメールを送ってしまったのです。それに対し中嶋先生は、次のように返答してくださいました。

ディベートのねらいは？
ディベートでつけたい力は？
「即興性」に目を奪われてしまっては失敗します。
それを再度確認すれば、指導も気づきも浮かび上がってきますよ。

大切なのは、生徒のポテンシャルと自分のやってきたことを信じることだったのです。

８．２校（３年）によるオンライン・マイクロ・ディベート

生徒たちは、研究授業と校内での「**マイクロディベート・チャンピオンシップ**」（トーナメント）を終え、最後は福島県尚英中との「オンライン・ディベート」を残すのみとなりました（その時の写真が、このレポートの冒頭にお示ししたアイキャッチの画像です）。

夏前には、福島県の尚英中学校と「修学旅行レポート」をオンラインで実施しました。お互いの修学旅行での思い出をスピーチ、その後質疑応答を行いました。１０月には「私の尊敬する人」スピーチも実施、

これも相手の話を聞いた後に質疑応答を行いました。

交流の最終章は「オンライン・マイクロ・ディベート」でした。

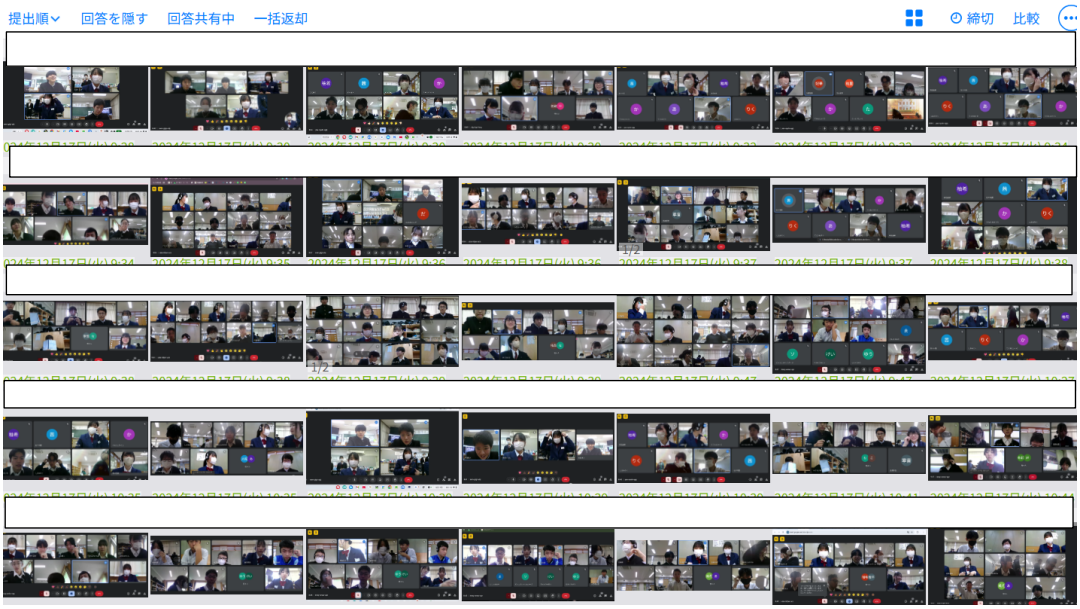
これまで私がレポートしてきた指導内容を八木先生も尚英中で行ってくれていましたし、オンラインでの交流は３度目でした。そのため、驚くほどスムーズに交流に突入することができました。もし、これが「初めての交流」だったら、きっとマイクロ・ディベートはうまくいかなかったことでしょう。

オンライン・マイクロ・ディベートの「テーマ」（論題）は、次のとおりです。

“We should live in big cities when we grow up.”

住んでいる場所が違う２つの学校の中学生が、お互いの地域の特色や特徴を「生活の論理」として話すことができるのではないかと考え、このテーマにしました。

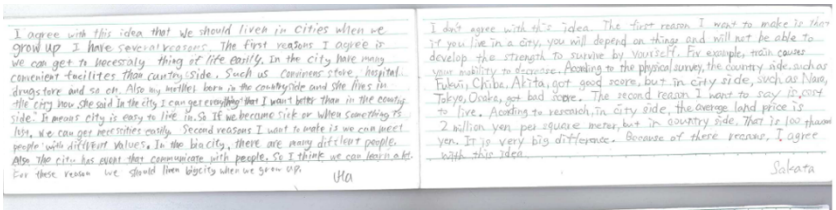
オンラインでの様子は、全員が動画撮影し、ロイロ・ノートで提出ボックスに提出してもらいました。音声トラブル等はあったものの、どのグループも笑顔と感謝で交流を終えていたのが印象的でした。



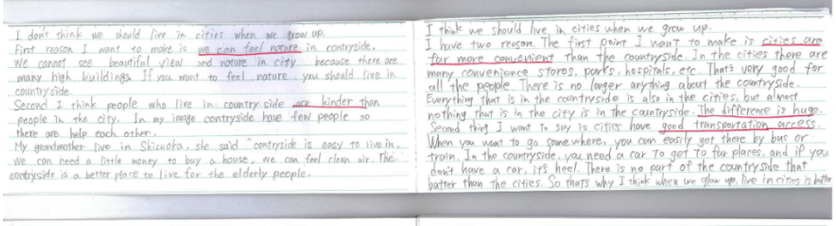
９．「書く力」がディベートの「起爆剤」に

以下にご紹介する画像は前述した「リレー・ノート」のものです。

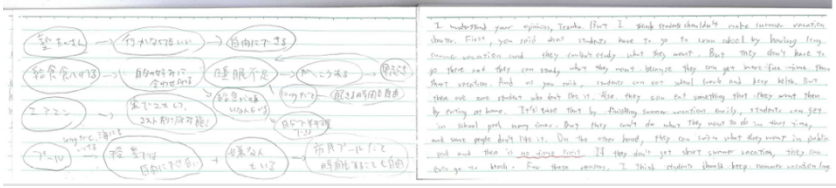
１班



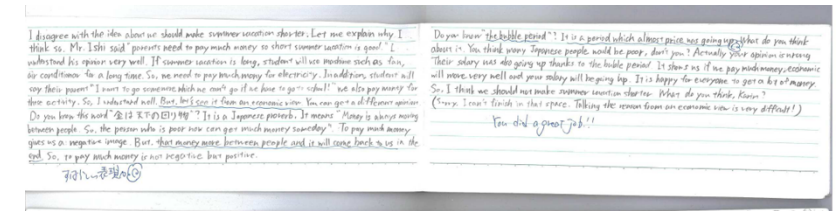
２班



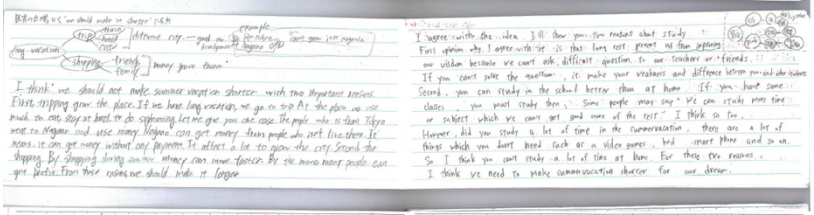
３班



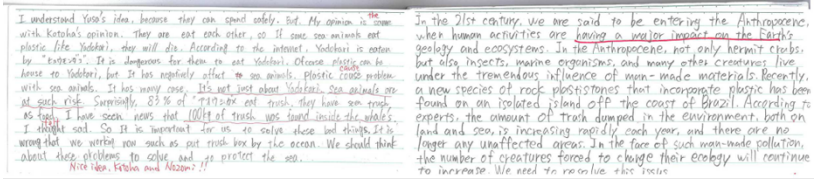
４班



５班



６班



ご覧の通り、ノートいっぱいに意見が書かれていることがわかります。はじめは B5 のノートを３分割して始めましたが、「それでは書き足らない」という生徒の声を受け、２冊目は A4 のノートを３分割したものになっています。それでも、生徒たちは画像のようにびっしりと意見を書いていることがわかります。生徒たちの可能性は教師の想像以上です。「難しいのではないか」という教師の勝手な判断（過小評価）が、生徒の可能性を摘んでしまうのだということを痛感しました。

ディベートの単元学習に入る前に、生徒たちには４月から「**チェーン・レター**」（『英語のディベート授業 30 の技』より）をはじめ、連休明けからは「**リレー・ノート**」で伏線を張ってきました。自分の手（指）を使い、「**書くこと**」を積み重ねてきたからこそ、生徒たちの「即興でのやり取り」の内容が稚拙にならな

ずに済んだのです。「**書くこと**」こそが「**思考力・判断力・表現力**」の起爆剤になると中嶋先生がおっしゃっていたことを生徒たちが証明してくれたように思います。

このレポートでは「英語ディベート」までのプロセスについて書いてきましたが、その背後にはこのような「書くこと」の指導があったこともお伝えしておきます。

［追記］

３学年の後期、道徳授業の振り返り用紙を生徒に記入してもらったことがあります。その記述に、次のような言葉がありました。

「別の視点や観点から物事を考える力がついた。」

「最初はそれでよいと思っていたことも、客観的に見つめ直すと異なる結論が出てくることが多くて面白かった。」

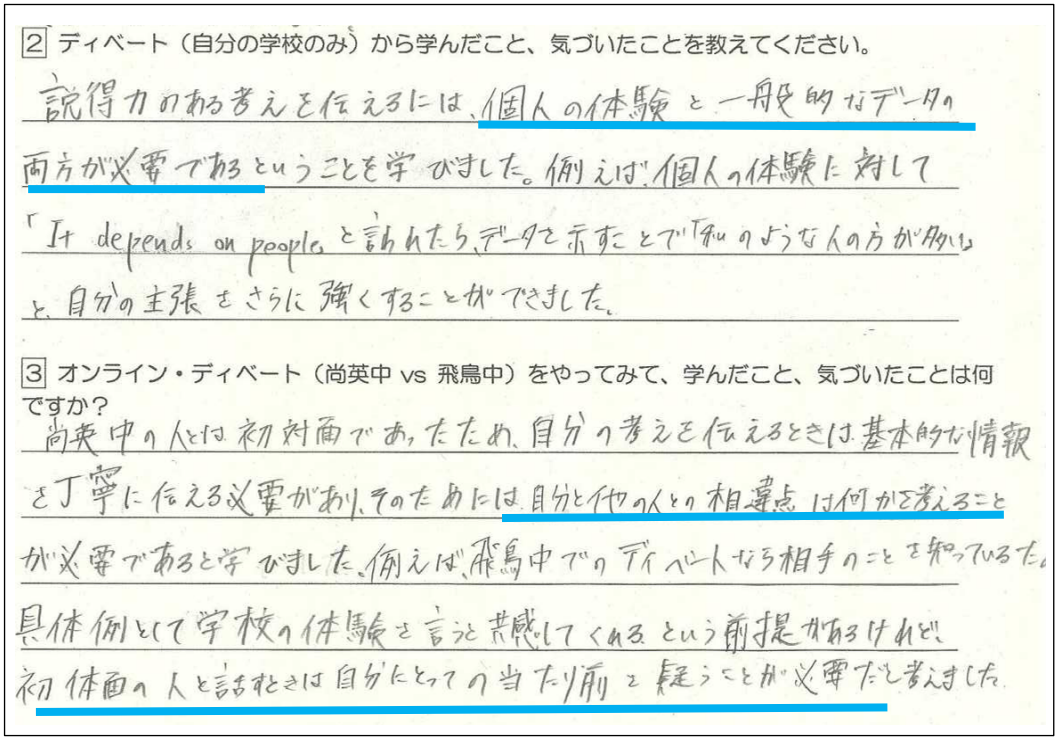
「友だちの意見を聞くことで、同じ結論を出していたとしても理由が異なることがあった。」

「人と関わることの意味は、自分の意見と比較しながら、どちらが優れているかを決めることではなく、違いから学ぶことだった。」

ディベートの授業だけでなく、学年全体でチームとして協働したからこそ、このような言葉が出てきたのだと考えます。学校全体で協働し、言葉の定義を確認しておくことの意味を再確認しました。

１０．　生徒たちが「ディベート学習」から学んだことは

節目の活動をした後には、必ず「まとまった振り返り」を言語化することを心がけています。生徒たちは「英語ディベート」という学習を通じて一体どんなことを学んだのでしょうか。



2 ディベート（自分の学校のみ）から学んだこと、気づいたことを教えてください。

説得力のある考えを伝えるには、個人の体験と一般的なデータの両方が必要であるということを学びました。例えば、個人の体験に対して「It depends on people.」と言われたら、データを示すことで「私のような人の方が多い」と、自分の主張をさらに強くすることができました。

3 オンライン・ディベート（尚英中 vs 飛鳥中）をやってみて、学んだこと、気づいたことは何ですか？

尚英中の人とは初対面であったため、自分の考えを伝えるときは基本的な情報を丁寧に伝える必要があり、そのためには自分と他の人との相違点は何かを考えることが必要であると学びました。例えば、飛鳥中でのディベートなら相手のことを知っている。具体例として学校の体験を言うと共感してくれるという前提があるけれど、初対面の人と話すときは自分にとっての当たり前を疑うことが必要だと考えました。

自校の友だちとディベートをした際と、他校の生徒とディベートをした際で気づくポイントが異なっています。気心知れている仲間と話す時に注意するべきことと、そうでない場合では説明すべき内容を変更しなければならないことに気づいたようです。

2 ディベート（自分の学校のみ）から学んだこと、気づいたことを教えてください。

自分は人生の中でこんなにも準備をしたことないくらいじゅんびをしました。立論はもちろん、はんばくシートなど先生からもらったたくさんのぶきをつかってみんなとたたかうのはとてもたのしかったし、どりょくした分負けた時はとてもくやしかったです。

「たくさんのぶき（武器）」という表現がとても心に残りました。生徒たちにとって、様々な思考ツールはまさに「武器」です。生徒たちに、英語を得意にする、英語が楽しみになる「武器」を私たちは与えてあげなければなりません。

3 オンライン・ディベート（尚英中 vs 飛鳥中）をやってみて、学んだこと、気づいたことは何ですか？

反ばくする時に、"I understand ~" とか "I see your opinion, but ~" と、一度、相手の意見を肯定することは、相手への配慮になり、「あなたの意見も分かるけど私はこう思うな」と自分の意見を伝えられる前の鍵になると感じた。オンラインでずっとうごけたときも、みぶり手ぶりで反応してくれて反応（リアクション）の大切さを改めてかんじた。

2 ディベート（自分の学校のみ）から学んだこと、気づいたことを教えてください。

ジャッジをする時、双方の話しを聞く前に「この人、頭がいいから勝っただろうな」とか勝手に決めつけないことが大切だし、その人のことを知っているからこそ、日常に引っぱられてしまうけど、意見の内容や伝え方がジャッジを決める一番大切だと学んだ。

ディベートという活動を生徒にどう捉えてほしいのか、という当初のねらいが振り返りに書かれていました。勝ち負けにこだわるのではなく、そこから「何を学ぶか」ということを生徒たち自身が大事にしていることを発見し、胸をなでおろしました。

教科書をただ終わらせるのではなく、「付けたい力」「育った姿」を設定し、その具体的な姿に向かって計画を練り、修正を繰り返しながら最後まで諦めずにやり遂げた経験は、私にとって大きな財産となるでしょう。改めて、ここまでご指導くださった中嶋先生に感謝しかありません。

最後に.　「バックワード・デザイン」は果てしなく深い

ここまで「英語ディベート」における「プロセス」に焦点をあててレポートを書き記してきました。人生初の「英語ディベート」に挑戦し、「付けたい力」「育った姿」から逆算して活動を組み立ててきました。二年前から少しずつ始めた指導も９月以降に本格化し、１１月には研究授業で区内の小中どちらの先生方にも指導を公開しました。また、その際は中嶋先生に講師を務めていただき、１００名を超す先生方に講演をしていただいたことは前述したとおりです（ちなみに、講演時間は 16 時１５分までででしたが、延長の講演を聞くために４０名以上の先生が会場に残りました）。

続けて、１１月末に校内でのマイクロ・ディベート・チャンピオンシップを、１２月にはオンライン・マイクロ・ディベートを開催することもできました。子どもたちと一緒に登った山の景色は美しく、努力を積み重ねた分だけ胸に迫るものがありました。ここまで読んでいただけた読者の方がいらっしゃったなら、さぞかし筆者が満足しただろうとお思いに違いありません。

しかし、私の心には一抹の「モヤモヤ感」が残っていました。何だと思われますか。

それは「ディベート後の世界」をイメージしていなかったことでした。私は「付けたい力」「育った姿」から逆算していたつもりでしたが、その「先」まではイメージできていなかったのです。

私は昨年、中嶋先生から次のように教わっていました。

> **成果物は「作って終わり」ではありません。そこからが大事です。その後の展開、先の先まで考えておくことが授業の肝です。そうしないと生徒の心に「余韻」が残ることはありません。生徒の心に「余韻」が残らない限り、成果物を作る意味はありません。**

結局は、マイクロ・ディベートを実施することに精いっぱいで、その「先」までをイメージしていなかったのです。マイクロ・ディベートを終えた生徒たちが燃え尽き症候群になっていたのは、私がその先をイメージし、余韻のある終わり方をしていなかったこと、次につながるステージを用意していなかったことの証でした。

新しい挑戦が始まりました。３年間を見通してつなげるバックワード・デザイン。果てしなく深いと感じます。しかし、また大きなやりがい、こだわりが生まれてくることは間違いありません。